

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0214 NO94

校長 伊波喜一

久方に 同級生の 集まりて 親の介護に 話題花咲く

学生時代の友人数名が、都心で落ち合った。中には10年以上、ご無沙汰していた者もいる。出会ってからすでに数十年。皆それなりに年は取ったが、相変わらず口だけは元気である。性別も仕事も異なるが、会ったと同時に意気投合できるのは、同じ釜の飯を食べたからに違いない。お金のない当時、みなで寄り集まっては安酒で盛り上がった。時の話題をつまみにして、熱く語ったのも懐かしい。

海外で日本の教育がクローズアップされていることの一つに、給食がある。準備から片づけまでの全てを、子ども達が主体的に行っていることが、海外の人には驚きであるらしい。中でも、班ごとに話題を共有して食べる習慣は、車座の豊かな関わりを連想させて面白い。車座は話題の中心がどんどん移り変わる。一人が話題を占めてしまっては座が盛り上がらないので、車座の座談の妙手は自ら口火を切るものの、話題を上手に振りながらみんなに口を挟ませるのが上手だ。今回は親の介護に花が咲いた。次回集まれるのはいつのことだろうか。別れ際に交わした握手を、何度も握り直した。